
せいいていさんがんばって！

えいせん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

せいいていさんがんばって！

【Nコード】

N5694Z

【作者名】

えいせん

【あらすじ】

その男、転生する。帝王の力をその身に宿し。その女、前進する。哀しみを背中に背負い。その者、渴望する。このぬくもりと、あの『愛』を。これは、格闘ゲームの素晴らしさを説くお話（嘘）。これは、『帝王』の話。

ていおう！（前書き）

何一つ考えてないこの小説を開いてくれてありがとうございます！
楽しんでもらえたらいいなー！

ていおう！

くそっ！

一体どうなってやがるんだよおい！

いつものように村に『お邪魔』して食いもんを貰って・・・あわよくば女も頂こうかなんて俺達は思ってた。

なのに・・・これは一体どういうことなんだ！？

「何やってんだよお前ら！こんな奴らにてこずりやがって！」

「む、無理だよアニキ！こいつら、いつもと違う！」

村人達が俺達に抵抗してきたことなんていくらでもある。

だけど、俺達が今まで生きてこれたのはそんな奴らを力でねじ伏せて来たからだ。

「くそ！？なんだよこいつら！？う、うわあああああつ！！！」

また一人、仲間が死んだ。

「俺達の村に入ってきたやつて！死んでしまえ！」

「な、なんなんだよ！」

純粹な強さで言えば俺達が確実に強いだろう。

俺達は賊だ。

俺達の方が圧倒的に経験を積んでいる。

村人達の中では今まで人を殺したことすらない奴だって少ないうしろだろう。

なのに、俺達を押されている。

「ハアアアッ!!」
「ぐえっ」

一人、俺達の誰よりも強い女がいる。
腰まで届く紅い髪。

俺達と大差ないほどの長身で、鋭い目。
力強い印象を与えるその風貌で、俺の仲間を次々となぎ倒してい
く。

この女の槍によって俺の仲間は何人も死んでいったが、この女に
俺達が劣勢になるほどの力はないだろう。

どれだけ強かろうが、所詮一人で出来ることには限りがある。

俺達がここまで劣勢に立たされているのは恐らく、たった一つの
こと。

・・・俺達は、村人達に恐怖を感じている。

この村の雰囲気、異質だった。

村人の一人を殺す。

そうすると、どんな村でも足が震え、逃げ出す奴が居た。

なのに・・・この村はどうだ!?

怒りに顔を歪ませて、次から次に突っ込んできた。

片腕を失くせば、もう片方の腕で。

両足を失くせば、両腕で首を締めあげて。

両腕を失くせば、その体で仲間の壁になり。

正気の沙汰じゃねえ！

足が震える？

震えているのは俺達の方だ！

俺達は人間だ。

人間ってやつは、恐怖って感情がある。

人を殺す恐怖ってやつは、俺達だって感じてる。

それを俺達は殺し続けることで、感じないように思わせているんだ。

それでも、死ぬ恐怖ってもんは誤魔化そうって思っても出来るもんじゃない。

出来たらもうそれは人間じゃない。

・・・鬼だ。

こいつらは人間なのか？

傷つくことを躊躇わず、自分が戦えないと悟ると仲間のために命を張り。

これが、ただの村人だっていうのか！？

村『人』なのか！？

あり得ない、人間の出来る事じゃない！

こいつらは、まるで・・・！

「ヒツ・・・！？」

なんだ、この女・・・

肩で揃えられた銀の髪。

さっきの女よりは小さいだろうが、すらりとした体。

その体を、漆黒の服で包む、絶世の美女と呼ぶに相応しい容姿を持った女は、防具の一つも付けずに、こっちへ歩いて来る。

見ようによつては天使が降り立ったようにも見えるかもしれないが、俺には悪魔にしか見えなかった。

殺気の一つも感じられないその女の目には、俺たちなど視界に入つてすらいなかった。

「俺達には帝王様がついているんだ！負けるはずがないんだ！」

「何？帝王だと！？」

帝王。

そうか、こいつが帝王か。

ということは、あの女は『陥陣営』か。

たった二人で賊を潰してまわっていると聞いたことはあるが……この村に居やがったか。

ツイてねえ……ツイてねえが、二人さえ潰せばこの村の奴らだつて、ビビって逃げ――

「ふむ。……貴様ら、かかってくるがいい」

目が、あつた。

たったそれだけで……俺は、殺された。

格が、違う。

足が、手が、動かない。

凜としたその声が俺の体を侵食していく。

圧倒的な力の差を感じ、俺の体は震えるということすら放棄したようだ。

「こぬのならこちらから行くぞ！」

物凄い速さでこちらに近づいてくる姿をなんとか目で捉えるが、体は一向に動かない。

その手で道を阻む仲間を蹴散らしていく。

それを見て俺の頭は警告を全身に伝えていくが、肝心の体は反応すら返してくれない。

気がつけば、俺は血を吐いていた。

痛みすら感じずに、ただその不快感だけを認識して、急に意識が遠のいていく。

ツイてねえ。

村人が異常だったのでは無かった。

この女の、帝王の覇気が異質だったのだ。

・・・本当に、ツイてねえ。

俺は、倒れるという最後の仕事のためにようやく生き返った体に鞭を打ち、後ろを向いた。

自分を殺した相手と思えないほどに美しい『帝王』の背には、何故か哀しい漢が視えた気がした。

ていおう！（後書き）

うちの帝王はEボタンカラーです。
あなたの帝王は、何カラー？

続く・・・続くのか？

はじまり！（前書き）

次はトキか！ラオウか！

ジョインジョインジョイン

ジョイントキイ

はじまり！

転生。

もし自分が転生できると聞いた時、皆はどう思うだろうか。
夢のような世界へ行けることを喜ぶのか。

不思議な力を得ることに涙するのか。
それとも、今までの世界から消えることに悲しむのか。

俺か？

俺はもちろん、喜んだよ。

「本当に俺が転生するのか！？」

「本当だ。私が嘘をつく意味がない」

急に大きな声を出した俺を呆れた様な目で見る男。

赤と黒の派手なスーツに身を包んでいる、ということしかこれと
いった特徴のない男。

今の状況的に、こいつが神だと思っんだが・・・影が薄いな。
服の派手さに負けてるよ。

「君のような反応をしてくれる方がやりやすい」

「そうなのか？」

「泣かれたりしたらこっちも困るんだ。時間がかかるからな」

「確かに」

「そんなことより、だ。君もわかっているだろう？なんの特典も付
けずに送れる訳がないということを」

男がそう言うと、何もない空間から漢字が沢山書かれたスロットが出て来た。

「そのスロットを回してくれ。その内容に沿った特典をあげようじゃないか」

「内容？」

「そうだな・・・例えば『頂肉体』が出たとして。その世界での人類最強の肉体を手に入れる。他にもスロットの字次第では架空の技や力を手に入れることも出来る」

非常に夢が膨らむ内容だ。

「まあ、全てがスロットの字で決まるから・・・『無能力』なんてのが出ることも」

「えっ？・・・え、えっ！？」

「スロットだぞ？スロットは博打だ」

「ちよつとちよつと！特典くれるんじゃないの！？え！？」

「それはまあ、能力がないのが特典になる訳で・・・『超不幸』とかよりはマシだと思えば」

「その『超不幸』とかになつたらどーすんの？どーすんのよ！？」

「まあ、運命だと思ってくれ」

と、いうことは・・・弱くてニューゲームなんて最悪なことも起こるかもしれないのか。

・・・もとのせかいにかえりたいよ。

「まだスロットを回してないから落ち込むこともないと思うが」

「そうだよー！いいの出るよー！」

「知らん」

果てしなく不安になる気持ちを抑えて、スロットを・・・回す！
何が出るんだ？

聖？聖なる力的な？

帝？聖帝になるの？

王？聖帝王ってなに？

「良かったじゃないか。大分良い特典だぞ『聖帝王』は
「そうなの？」

「ああ、架空の能力をもらう訳だからな」

架空の能力か・・・
聖帝で帝王・・・

ん？んん！？

「もしかして・・・」
「そうだ。あの聖帝だ。・・・格闘ゲーム仕様だがな」

それってどうなの？
喜ぶべきなのか悲しむべきなのか・・・

「微妙な顔をするな。あのゲームのバランスがおかしいだけだ。十分強力だよ」

なら強いのか。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！

いやまあ、病人の方がいいなーとかちよつと思ったりもしたよ。でも、十分強いらしいしもう満足だね。

うん。

良かったークソみたいな特典じゃなくて！！

「良かったークソみたいな特典じゃなくて！！」

「運が良かったじゃないか」

やっぱり声に出して言うべきだね！

「世界は・・・恋姫の世界に行ってもらう」

おお！

チート特典で大暴れしてモテモテ生活！

なんてことも・・・いいじゃないか！

「容姿の設定も聞くが・・・望みはあるか？」

「そこはやっぱり・・・10人中9人が振り向くようなレベルの容姿が欲しいなと」

「わかった。そうしようじゃないか。」

キテる。

キテるよ！

俺の時代キテるよ！！
モテモテ生活確定ですね！！

「お前のニヤついた顔を見ると何を考えているか手に取るようにわかるな。まあ、逝ってこい」
「逝ってきます！！」

お父さん、お母さん。
幸せになっ てきます！

世界から、一人、飛び立った。

前が見えない。

目を開けてないから見える訳がないんだけどね。

「あなた、これが私達の子ですよ」
「おお！お前に似てとても可愛い子だ！」

「もう、恥ずかしいことを言わないで下さいよ！」

「本当のことを言って何が悪いというんだ」

「これが俺の孫、か・・・」

「そうですねお父さん。抱いてみます？」

「う、うむ・・・悪くないな・・・」

目を開けると、長身の男が俺を抱きかかえていた。

年齢50といったところか、洪さの漂うその風貌はさながら敏腕スナイパーのよう。

しかし、その目を真つ赤に腫らしてくしゃくしゃになったその顔は、孫の誕生を喜ぶ爺そのものだった。

「そうか、孫か・・・こんなに早く見れるなんてな・・・」

「お、お父さん！？どうしたの!？」

「いや・・・ちょっと目にゴミが入っただけだ。大丈夫だよ」

「そう・・・お父さん、ありがとうね」

「お前は・・・俺を泣かせたいのか？」

目から涙を溢れさせた俺の爺さんのその横で、俺の親が仲良く笑って見つめていた。

その笑顔を見ていると、前の親を思い出してしまう。

碌な親孝行もせず、半ば家出のように一人暮らしを始めた。

最後に見た両親の顔は、寂しそうに笑っていた。

俺は才能という奴に恵まれていなかったが、それでも俺の頑張りを評価してくれた。

俺が生まれたとき、今の親のように笑っていたのだろうか。

俺が居ないと知って、どうするんだろうか。

そんなことを思うと、何かこみ上げてくるものが。

気がついたら、俺は大声で泣いていた。

「お、おい！？いったいどうすればいいのだ！？」

「お父さん、落ち着いて」

お父さん、お母さん。

『父さん、母さん』。

ここで幸せになります。

はじまり！（後書き）

主人公と両親の名前、どうしたらいいのか・・・
帝王さんには哀しみを背負ってもらわないといけないし・・・

続け！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5694z/>

せいといさんがんばって！

2011年12月19日14時50分発行